

一般市民から見た沖縄の色

— 那覇市および近郊の市民からの聞き取り調査 —

三星 宗雄

はじめに

沖縄は我が国の中で色彩に対する意識が高い地域の一つである（三星，2008）。共同研究「世界の色の記号に関する実証的研究—自然・言語・文化の諸相—」とのつながりで何度か訪れる機会があったが、訪れるたびにそう感ずるのだ。それは、サンプル数はきわめて限られているが、たとえば公衆トイレなどにも表れているように思われる（図1 三星，2009）。いわば生活の末端部に属する場所であるにもかかわらず、そこにきちんと「沖縄の色」が施されているのである。沖縄の色、赤瓦と白壁、が分かりやすいせいかも知れないが、他の地域でそこを強く感じたことはあまりない。

それには多くの理由があるに違いない。東シナ海における島嶼性や琉球王国からの歴史意識などもその一つであろう。しかしその中で亜熱帯という気候とそれに特有な自然環境も大きな役割を果たしているのではないかと思われる。身近にはっきりとした色彩を持った海や花があれば、そこに住む人々是否応なくそうした色彩を意識することになるだろう。

ところで那覇市の「那覇市タウンカラースタンダード」（同市都市計画部都市計画課都市デザイン室発行）は色彩についての基本的なはたらきとともに、色彩使用のコンセプトについて非常に分かりやすく記されている他に例を見ない素晴らしいガイドラインである。その副題は「コーラルホワイトを基盤にした亜熱帯庭園都市の色をつくる」となっている。

一方山川（1999）によるとたまたま乗ったタクシーの運転手の話として、「白は北海道の色だよ」という話を紹介している。このタウンカラースタンダードがいつ策定されたのか不明であるが（手元にあるのは平成15年3月発行版）、今後「コーラルホワイト」が那覇の色として浸透していくのかも知れない。

しかし上のタクシー運転手の話や「沖縄の色」と「那覇市の色」と「那覇市の街の色」などがどの程度切り分けられて意識されているのか、あるいはそもそも沖縄または那覇市に住む人々が自分たちの地域の色について実際どのように感じているのかを明らかにしてみたいという問題意識から簡単な意識調査を試みた。今回は「那覇市の色」ではなく、「沖縄の色」について調査を行った。色の調査にはJISの色見本帳を示し、指し示してもらうという方法を用いた。また同時に沖縄の色彩を特徴づける赤瓦についての印象およびすべての事物の中で、沖縄を代表するものについてもデータを集めた。

サンプル数が少なく、そこから結論めいたことを導くのは難しいが、今後予定しているきちんとした



図1 那覇市内で見つけた公衆トイレ（那覇市松尾）

調査のための予備調査として位置づけてみたいと思う。

方法

色票 色の調査には「JIS 色名帳 高彩度版」(日本規格協会, 2007 年発行)を用いた(図 2)。同色名帳はマンセルの基本 10 色相を 4 等分した 40 色相(たとえば色相赤の場合, 2.5R, 5R, 7.5R, 10R となる)をトーンごとにまとめたものである。トーンについては図 3 参照のこと。持ち運びと聞き取り上の煩雑さから「同 低彩度版」は使用しなかった。また同色名帳には無彩色, 特に白がなく, その点では問題があった。ただ口頭で「白も含めて下さい」とは伝えた。

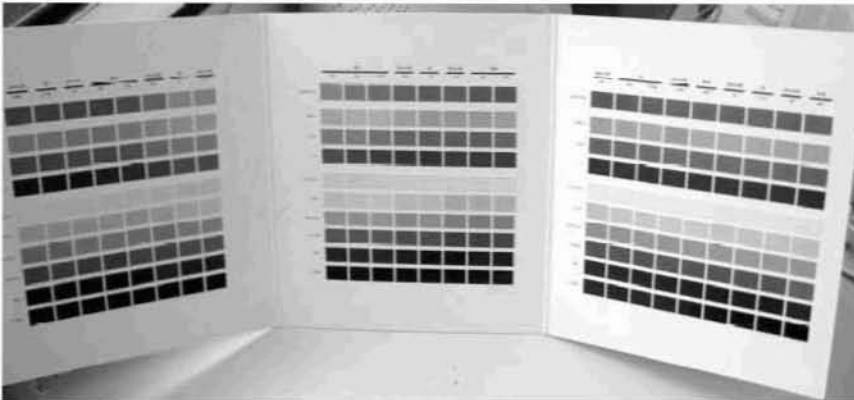


図 2 JIS 色名帳 高彩度版

調査の対象者 那覇および近郊の市民(高校生から 79 歳まで), 23 人(男 16 名, 女 7 名)であった。

実施日 2009 年 3 月 23 日~26 日。いずれも天気は晴れであった。

場所 那覇市および近郊の駐車場, 庭園, 公園, ホテル, 役所内広場, 知人宅などで行った。

手続き 上記色名帳を開き, 以下の質問に対する答えを求めた。

- (1) あなたが沖縄の色としてふさわしいと思う色を 3 つ指し示して下さい。他に白も含めて考えて下さい。もしここにない色であれば言葉で言って下さい。
- (2) あなたは沖縄の赤瓦についてどう思いますか。
- (3) もっとも沖縄らしい事物, 建築, 行事, その他何でも結構ですが, 1 つ挙げて下さい。

結果

表 1 は上記質問項目 (1) の結果である。用いた色名帳の特性上, 色相とトーンによって分類されている。色相を 10 の大分類にまとめて示したのが表 2 である。図 3 にトーンの色空間上の位置を示す。表 2 から沖縄にふさわしい色としては青がもっとも多く, 全色相の中のほぼ 1/3 を占めた。次いで赤が多く, 緑がそれに続いた。この 3 つの色相が代表的な色で, 全色相の中の約 73% を占めている。ちなみに白はわずかに 1 例だけであった。また赤の中には, 用いられた色名帳にあるもっとも鮮やかな赤以上に鮮やかな赤という答えが 3 例あった。

色相をトーンごとに細かくみると, 鮮やかな青と鮮や

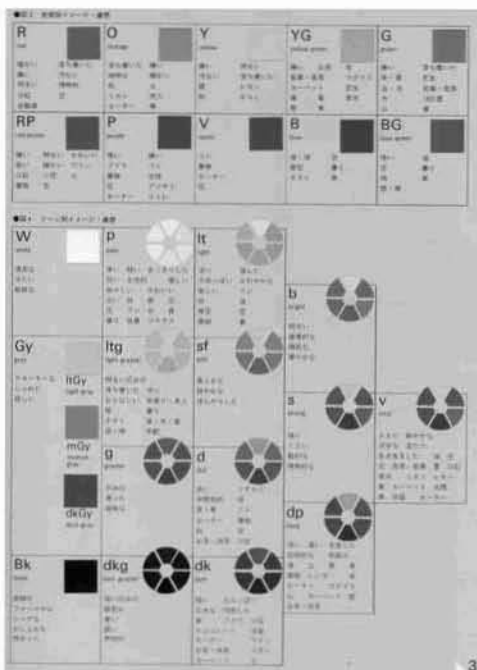


図 3 色のトーン 下の色群の右端 (v) が「鮮やかな」, It が「浅い」トーンである。ちなみに上の 10 色は今回用いた色見本帳の中の基本 10 色相である。ただし O (橙色) は YR (黄赤), V (すみれ色) は PB (青紫) に対応する。

かな赤および「もっと鮮やかな赤」の合計がもっとも多く（12 例），以下，浅い青，鮮やかな緑となった。

さらに細かく見ると，鮮やかな 10B が圧倒的に多く（10 例），以下鮮やかな 7.5R（5 例），鮮やかな + もっと鮮やかな 5R，鮮やかな 5G，浅い 10B が 4 例で続いた。10B というのは比較的紺色あるいは群青色に近い青で，我々日本人には「もっとも青らしい青」として感じられる色である。

トーン別に見ると，さすがに鮮やかなと「もっと鮮やかな」が圧倒的に多く，全体の半数以上を占めた。図 4，5 はそれぞれ上の結果を図示したものである。

表 1 沖縄の色 色相名の詳細については本文参照のこと

	色相				色相			
	2.5R	5R	7.5R	10R	2.5YR	5YR	7.5YR	
ト ー ン	> 鮮やかな (more vivid)		3	1				
	鮮やかな (vivid)	3	1	5		1		
	明るい (bright)							
	浅い (light)	1		1				
	うすい (pale)							
	ごくうすい (very pale)							
	強い (strong)	1						
	濃い (deep)							
	2.5Y	5Y	7.5Y	10Y	2.5GY	5GY	7.5GY	10GY
ト ー ン	> 鮮やかな (more vivid)			1			1	
	鮮やかな (vivid)		3	1			1	
	明るい (bright)							
	浅い (light)							1
	うすい (pale)			1				
	ごくうすい (very pale)			1				
	強い (strong)							
	濃い (deep)						1	1
	2.5G	5G	7.5G		2.5BG	5BG	7.5BG	10BG
ト ー ン	> 鮮やかな (more vivid)							
	鮮やかな (vivid)	1	4					1
	明るい (bright)		1			1		
	浅い (light)		1					
	うすい (pale)		1					
	ごくうすい (very pale)					1		
	強い (strong)		1					
	濃い (deep)		1					

	2.5B	5B	7.5B	10B	2.5PB	5PB	7.5PB
トーン							
> 鮮やかな (more vivid)							
鮮やかな (vivid)	1	1		10			
明るい (bright)					1		
浅い (light)		3		4			
うすい (pale)				1			
ごくうすい (very pale)							
強い (strong)					1		
濃い (deep)							
	2.5P	5P	7.5P		2.5RP	5RP	7.5RP
トーン							
> 鮮やかな (more vivid)							
鮮やかな (vivid)							
明るい (bright)							
浅い (light)							
うすい (pale)							
ごくうすい (very pale)							
強い (strong)			1				
濃い (deep)							
		W					
無彩色		1					

表2 沖縄の色（10色相分類 白は除く）

	色相										
	R	YR	Y	GY	G	BG	B	PB	P	RP	計
トーン											
> 鮮やかな (more vivid)	3										3
鮮やかな (vivid)	9	1	4	1	5	1	12				33
明るい (bright)					1	1		1			3
浅い (light)	2			1	1		7				11
うすい (pale)			1		1		1				3
ごくうすい (very pale)			1			1					2
強い (strong)	1				1			1	1		4
濃い (deep)				2	1						3
計	15	1	6	4	10	3	20	2	1	0	62

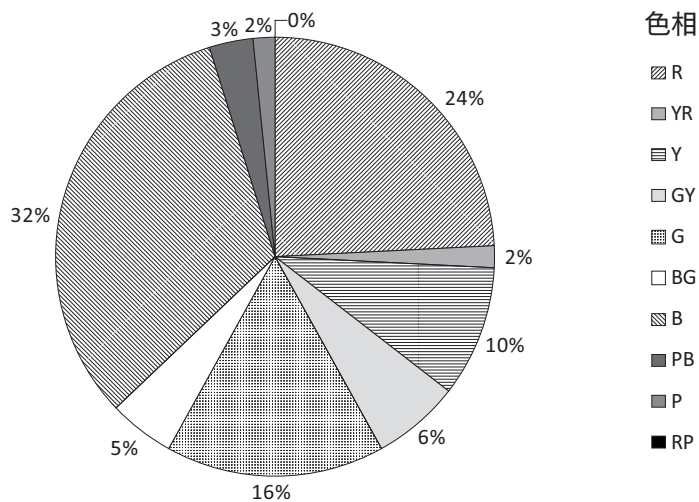


図4 沖縄の色（10色相分類別 白は除く）

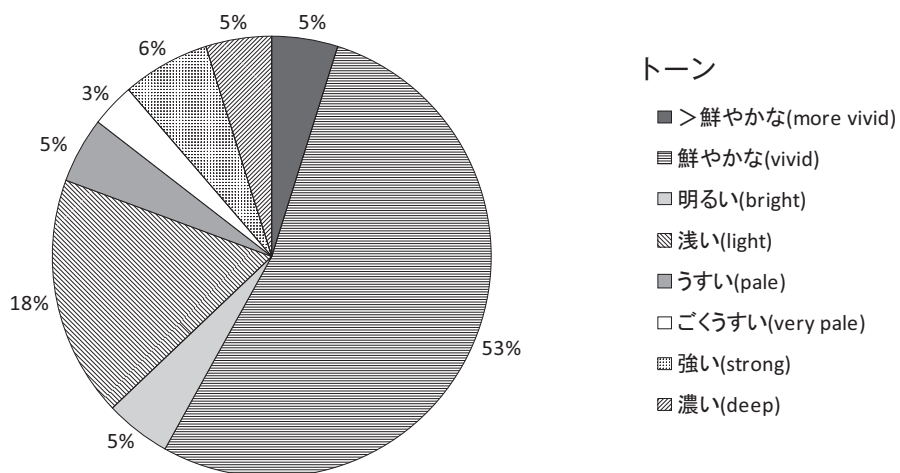


図5 沖縄の色（トーン別 白は除く）

表3 沖縄赤瓦について

・生活の一部になっているのであまり意識しない (特別のものではない 当たり前, 昔から見ているを含む)	8
・沖縄らしい (沖縄の風土を含む)	7
・いい (いいイメージ, いい印象, 風景としていいを含む)	6
・好き (大好きを含む)	3
・小さな時の思い出 (懐かしいを含む)	3
・意識する	1
・木造には似合う	1
・金持ち	1
・古風	1
・涼しそう	1
・どこか違う印象	1
・沖縄の光の反射との対比	1
・落ち着く	1
・自己主張している	1
・好きではない (四角いコンクリートがすき)	1

表4 沖縄を代表するもの

・青い海	6
・暖かい人柄 (お年寄り 若者は現代的) (心の豊かさ)	4
・赤瓦	4
・シーサー	4
・祭 (綱引き)	2
・亀甲墓	2
・首里城	1
・食べ物 (チャンプルーなど)	1
・三線+踊り	1
・紫外線の強さ	1
・ヒンブン	1
・戦争に対する思い (いい伝え切れていない, 戦場になったこと)	1
・紅型	1
・空	1
・平和の礎	1
・自然に任せる	1
・特になし	1

表3, 4はそれぞれ上の各質問項目(2)および(3)についての答えを示したものである。沖縄赤瓦については肯定的な答えが多かったが、もっとも多かったのは「あまり意識しない, 特別のものではない, など」であり、日常においては常に意識されているわけではないことが窺われる。

しかし一方「小さな時の思い出」, 「金持ち」, 「古風」, 「涼しそう」, 「どこか違う印象」など何か自分とはかけ離れた存在であるような答えも見られた。「好きではない」という答えも1例あった。

沖縄を代表する事物に関しては、「青い海」がもっとも多く、以下「暖かい人柄」, 「赤瓦」, 「シー

サー」と続く。「自然に任せる（何くるないさ）」を含め、沖縄を代表する事物としてその人柄または人間性を挙げるのが一番多かったことは著者にはやや驚きであった。

「戦争に対する思い」（戦場になったことを含む）や「平和の礎」があったことは沖縄の人々の心に戦争が今もくっきりと残っていることを示している（うち一人は79歳の男性）。

考察

本調査の特徴は言葉としての色名ではなく、実際の色見本帳を用いて沖縄を象徴する色についてデータを求めたことと、学校や学会会員などの組織や専門家ではなく、タクシーの運転手のような（今回の調査でも一人入っている）、那覇市内および近郊の公共の場所における普通の市民を対象とした点である。サンプル数が少なく、確固とした結論を導くことは困難であるが、その無謀さを顧みず、少し考察を加えてみたい。

那覇や近郊の市民には沖縄の色として青色を選ぶ人が多かった。手続き的に少し問題があったとはいえ、白色を選んだ人は一人だけであった。また「那覇の色」や「那覇の街の色」という質問の仕方であれば結果は変わったかも知れない。しかし上に紹介したように、那覇のタクシー運転手は明らかに「白は北海道の色だ」と言っているのである。人々の心にある「那覇の色」と「沖縄の色」は同じではないにしてもそれほど外れてはいないのではないだろうか。

タクシー運転手の話を紹介した山川（1999）は同じ報告書の中で以下のように記している。「私たちは本土の人間としては沖縄イコール那覇、那覇イコール沖縄といった印象が強い。“沖縄のイメージカラーは白”という人はたして何人いるか？」、「沖縄の色といえば、先ず空と海のブルー、紅型の朱や黄、プーゲンビリアの赤、・・・」と。

確かに沖縄の色として青色を挙げた人の多くは、沖縄の海を念頭においてのことだった。それは表4からも分かる。また実際に色を選ぶ際に「海の青だ」と断った人も多い。ただ「海の青」と言っても1色ではない。浜辺に近い部分における海の色とやや沖における色とは異なることが多い。沖縄では特に多いように思われる（図6）。そのどちらの色が印象深いかによって「鮮やかな青」と「浅い青」に分かれたものと思われる。

実は著者には沖縄の色として第一に青色が挙げられた結果にはやや戸惑いを覚えたのである。先に公衆トイレの色彩に関して、「沖縄の色」として赤瓦の赤と石灰岩の白と書いた。



図6 沖縄の海（恩納村みゆきビーチ）

それは言わば外部の人間の勝手な思い込みであったわけである。島内に住む人々にとって、沖縄の第一の色は決して赤色や白色ではなく、青色なのである。人間が作る建築と異なり、揺るがずに常に同じ様相で周囲に存在する自然の色彩はやはりそこに住む人々の心に強烈に焼き付いているようだ。青色に次いで多かった赤色にしても、赤瓦の赤と言うよりは鮮やかな花を念頭においている印象を受けた。

一方沖縄を代表する作物であるサトウキビやパイナップルの白い花には誰一人言及した人がいなかった。沖縄石灰岩についても言及した人はいなかった。やはり沖縄の人にとって白色は少し遠い存在の色なのであろうか（図7）。

参考までに佐藤（1999）によると、日本列島の沖縄エリアでは、「赤の美学」が基調色であり、好まれる色として「カーマイン系の赤を中心とする暖色色相・中明度&高彩度の清色系」（熱い・やや明る

い・冴えきった)としている。具体的には「最高彩度のカーマイン・レッド」,「コーラル・レッド(珊瑚朱)」,「ワイン・レッド」,「白」,「ビビッド・イエロー」,「ビビッド・グリーン」,「ビビッド・スカイ・ブルー」を挙げている。一方アクセントカラー(強調色)を「藍染めのネービー・ブルー」と「オフ・ブラック」としている。



図7 沖縄石灰岩の石畳(那覇市識名園)

このように佐藤(1999)によると、沖縄は圧倒的に赤の世界であり、白はそれに次いで好まれる色である。また好まれる色としてその次に挙げられている「ビビッド・スカイ・ブルー」は、今回の調査で「沖縄の色」としてもっとも多い回答があった「鮮やかな10B」の青色とはやや異なっている。後者の青色はむしろアクセントカラーとしての「藍染めのネービー・ブルー」に近い色である。この場合それが「アクセントカラー」として位置づけるべきなのかどうか、やや違和感を感じる。

ここで「那覇市タウンカラースタンダード」そのものについて筆者が何かを言うような立場にはない。先にも述べたように、「タウンカラースタンダード」は他に類を見ないほどすばらしい内容である。事実その中で沖縄を特徴づける自然の色として「青い海」も言及されている。

「タウンカラースタンダード」は自然の色ではなく、那覇の街の色に関するガイドラインである。またそこに盛り込まれているガイドライン,「コーラルホワイトを基盤にした」,というコンセプトは那覇の街にふさわしいものであろう。実際筆者も街中を歩いてみてそう思うのである(図8)。都市計画であるから、行政からの一定の案が出されるのは当然と言える。先にも書いたが、今後時間をかけて浸透していくのであろう。



図8 那覇の街並み(首里城からの眺め)

しかし「タウンカラースタンダード」の中に、策定にあたって,「沖縄らしさを意識した色を使うべき」,「空、海の色がいきるような都市の色を」というような声があったとある(p.9)。また建築士会会員等に対するアンケート調査および1995年に行われた日本色彩学会による調査を参考にしたとあるが、残念ながらどのような調査であったのかはここでは明らかにできない。

今筆者に具体的な案があるわけではないが、今回の超小規模な調査においてもこれだけはっきりと青色が多くの市民の意識にあることを考えると、どのような形で組み入れていく方法はないものかと思うのである。

ところで「沖縄の色」と「那覇の色」と「那覇の街の色」とを人々は日常生活の中でどの程度区別して意識しているのであろうか。筆者の住む横浜のシンボルカラーは青である。それはまさに海の色に由来するという。しかし現在横浜市内で青い海が見られる場所はほとんどない。「湘南の海」はもちろん横浜ではない。筆者の頭の中で、どの程度湘南の色と横浜の色とが区別されているのかあまり自信がない。横浜の街の色となるともうほとんど見当もつかない。いずれにしてもこれは今後明らかにしていきたい課題である。



図9 沖縄の赤瓦（恩納村琉球村）

沖縄の赤瓦については多くの人が好意を持って見ているのは当然と言えよう。しかし赤瓦の赤は決して鮮やかな赤ではない（図9）。多くの人が沖縄の色として挙げているのは鮮やかな赤であった。色見本帳にはないもっとあざやかな赤と指摘した人が3人もいたのである。上にも記したが、彼らの念頭にある赤はおそらく花の赤であろう（図10）。花は海と同じく常に身の回りにある存在なのであろう。

色彩とは直接の関係はないが、もう一つ意外であったのは、沖縄を代表する事物で二番目に多かったのが、人の暖かさなどの人間性に関するものであったことだ。ある人（女性）は「イチャリパチョウデイ」という方言を教えてくれた。実際はもう二つ教えてもらったのだが残念ながら忘れてしまった。それは「一度出会ったら皆兄弟だ」と言うような意味である。そうした言葉もさることながら、この人の行動そのものがまさに「イチャリパチョウデイ」なのである。



図10 沖縄寒緋桜。確かに色が鮮やかである。（本部町八重岳付近）

ある時知人（ある方から紹介されて、今回初めて知人になったのだが）と焼鳥屋に入った時、注文してやや時間が経ったところ知人がいきなり若い女性の店員の頭をピシヤリと叩いたのである。最初何が起きたのか分からなかったが、どうも料理を出すのが遅いというのが理由のようだった。店員の方もそれで別に怒るわけでもなく、にやりとするばかりであった。その79歳の老人に言わせると「イチャリパチョウデイだ」と言う。その老人こそが沖縄を代表する事物として、戦争の体験（伝えきれていないこと、戦場になったこと）を挙げた本人なのである。

このように沖縄の人たちは自分たちの持つ人間性あるいは精神性を大事にしているように思われた。佐藤（1999）によると、この地域で好まれるカラーイメージを形容詞に変換すると次のようになるという。

- ・価値因子 祝祭的な、民俗的な、装飾的な、自然主義的な、呪術的な、など
- ・情緒因子 晴れやかな、情熱的な、楽園的な、ナイーブな、情が深い、など

- ・力動因子 凝縮した、緊張した、動的な、リズムカルな、爆発的な、など
- ・尺度因子 膨張する、進出する、高い、長い、開かれた

それに照らし合わせると、「人の暖かさ」は「情熱的」というよりは「ナイーブな」に近いように思われるがあまりしっくりこない。一方「楽天的（何くるないさ）」は「楽園的」に近いように思われるが、これもあまりしっくりこない。

安間（2007）は、沖縄本島よりもさらに南に位置する八重山諸島の人々の性格として、以下のように記す。「八重山の人は、概してのんびりした性格だ。時間もあまり気にしない。何事もスローである。……しかし、そんな中にも極端な二つのタイプがあることに気付く。一つは、物事を十分に理解しないまま行動に移すタイプ。もう一つは、慎重の上に慎重を重ね、結果としてほとんど何もやらないタイプだ」（p.95）。

八重山諸島と沖縄本島ではやはりいろいろな点で異なるかも知れないが、しかし上の話を聞くと、何となくほほえましさを感じるのは筆者だけではないであろう。それがどちらの場合も「何くるないさ」の精神とつながっているように思えるのである。いずれにしても沖縄の人々が自分たちの人間性あるいは精神性についてこれほど強い自覚を持っていることは驚きであったし、と同時に大変魅了された点でもあった。

しかし今回の調査で最初に回答してくれた男性は、こうした沖縄の人が持っている伝統的な暖かさのようなものは若い人たちには薄れてきているようだと語った（彼自身も28歳という若さなのであるが）。また石垣島での景観論争はかなりマスコミを賑わした。やはり時代は変わっているのであろう。

あとがき

今回不十分な調査であるにもかかわらず、多くのことを学ぶ結果となった。第一に、ある地域に関して外部の人間が思い込んでいることと、そこに住む人々の本当の意識とは決して同じではない点である。自分たちの本当の意識とはかけ離れたことを外部の人間にあれやこれやと言われるのは、実にはた迷惑な話である。このレポートがそうならないかどうか恐れるばかりである。

しかし一方そうした枠組またはフレームに沿って逆に意識が変わっていくというダイナミズムもあろう。そういう意味で「那覇市タウンカラスタンド」がその役割を担っていくことを心から期待したいと思う。

謝辞 こちらからの紹介状があったとは言え突然の訪問を快く受け入れ、聞き取りに対応して下さった那覇市のYKさんにこの紙面を借りて厚く御礼申し上げます。その際にお聞きした沖縄戦のお話は大変感動的なものでした。これまで聞きかじったどの戦争の話よりも胸に迫るものがありました。また沖縄の風景に関する資料をたくさんいただきました。併せて感謝いたします。

紹介状も何も持たずに突然押しかけたにもかかわらず、那覇市の都市計画について懇切丁寧に説明して下さいました那覇市都市計画課のMHさんに心から御礼申し上げます。

引用文献

日本規格協会（2007）JIS 色名帳 高彩度版、日本規格協会。

三星宗雄（2008）沖縄の色、神奈川大学人文学研究所報 41、23-32。

三星宗雄（2009）公衆トイレのアンソロポロジー、神奈川大学人文学研究所報 42、13-31。

那覇市都市計画部都市計画課都市デザイン室（2003）那覇市タウンカラスタンド。

佐藤邦夫（1999）日本列島・好まれる色 嫌われる色，青俄書房.

山川やえ子（1999）那覇のまちのイメージカラーは白？，環境色彩研究会・沖縄研修報告 沖縄のまち・風土色を考える，日本色彩学会誌 23, 2, 89.

安間繁樹（2007）石垣島自然誌，晶文社.

The colors of Okinawa considered from the interviews with the citizens in Naha City and the suburbs

Muneo Mitsuboshi

Abstract

Interviews were attempted with the citizens in Naha City and the suburbs, asking (1)what colors you think are the colors of Okinawa, (2)how you think about Okinawa red tiled roof, and (3)what you think is the symbol of Okinawa in general. When they were asked the question 1, they responded by pointing 3 colors on the JIS Color Chart. Interviews were carried out on 23 - 26th of March, 2009. Data were collected for 23 citizens.

The color they selected most as the color of Okinawa was blue (32% of all colors selected), especially vivid 10B in Munsell notation. Red(24%) and green(16%) followed it. White was selected by just one person.

The results were briefly argued referring to the color guideline, Naha Town Color Standard, issued by Naha City, in which white was recommended as the color of Naha City.

The impression of the red tiled roof was generally positively accepted for the people. Among those, however, the most frequent response to the red tiled roof was that it was always around them, so it hardly made them remind it in their everyday lives.

The most frequent answer to the third question was the blue ocean. It seemed that the blue color they felt as the color of Okinawa came from the blue ocean.

Key words : Okinawa, Naha, color, red tiled roof, blue